

シリーズを始めるに当たつて――

## 若いお母さんたちへ

### はるにれの会

塚田 幸子



この四月から、はるにれの会のメンバーが交替でこのページを埋めるようにといふお話があつたのは、会の発足とほとんど同時、九月のある会合の時でした。私にとっては、三年にわたる米国生活から帰国して十か月の時間が流れ、カルチャーショック（浦島太郎現象という方が私にはぴったりでした）もようやく収まりかけていた頃のことでした。実際、頭髪は真白、何かにつけて今日の日の生活と自分の感じ方、行動の仕方との間にあるズレにとまどう日々だったので。そのため、会合は私にとってストレス解消のおしゃべりの場であったのですが、その雑談のような話の中から、いつの間にか新しい会が生まれ、まわりの人々が動き始めて、気がついてみると、自分は、その動きの渦の中ほどに置かれてしまつていたのです。

会のメンバー、というより、設立に向けて動いた核に

なる人たちは、若い母親たちで、はじめは、子どもの成長、発達を、遊びという視点から、母親あるいは保育者として見つめ、考え方をもってきた人たちです。ご存知の方は少ないとおもいますが、「遊びをみつめる会」のメンバーたちです。この会は現在も活動していく、出発してからは六、七年になるでしょうか。その中で、私は一番の古手、最年長ということになってしましました。子どもも中学一年と小学二年というようにずいぶん大きくなり、会にとつても、私のようなメンバーにとつても、今は転回の時期に来ていたのかもしれません。

最近では団塊の世代と呼ばれる私の世代は、その幼少期から世の中に対し常に新たな問題を投げかけ、大きな変動のうねりを起こしてきた世代です。それは無意識的にも、意識的にもなされ、この世代の圧倒的な数の多さにその一因があるのだと思います。焼け跡のすしづめ学級の義務教育時代、大学にあつては学園紛争を引き起こした世代と言えばおわかりでしょうか。結婚して最初の子どもが生まれた頃はニューファミリーと呼ばれたり

もしました。世界的に見ても、この戦後生まれのベビーブーム世代は、今になればもちろんひとりひとりでも十分その言動によって社会を動かす人もふえていますが、特別有名というわけではない人たちでも、底流として確実にこの社会にインパクトを与え続けています。

日本では戦後民主主義教育が浸透し始めた世代で、男女共学によつて、学生時代までは理想と現実の間に大きな違いのなかつた私たちの世代も、女性にとつては、就職、結婚、出産等を契機に、明らかな男女差別という既成の価値観との対立、闘争が始まりました。ひとりひとりを見れば、先鋭的に切りこんで行つた人もあれば、既成の秩序を重んじる人もあり、その形は実際に多様なものであつたと思ひます。大きな流れとしては、けれども、確実に、現在見えてきた方向に変わつてきています。それは、男性の中にも建て前としての男女平等がほんの少しずつでも浸透してきたことや、現実的にのみ対応する経済社会が、労働力としての女性を無視することができず、むしろ積極的な活用を図り始めたこと、需要を掘り

起こし、物やサービスを提供する側が、女性の様々な要求をくみあげてきたこと、そうせざるを得なかつたことなどの中にあらわれています。

ただ、今でも、出産、育児は、最大のネックであり続け、本来、そのこと自体は大いによろこばしいことであるのに、それを手かせ、足かせと感じる女性がどれほど多いことでしょう。私たちの会は、女性解放を叫んでいるのではなく、最初から子どもの立場に最重点を置いてきたわけですが、そこには、母親の問題が最も密接に結びついてくるのでした。

ここで私自身のことになりますが、どういうわけか、子どもを産んではから私の考えはすっかり変わってしまい、どうしても自分の子どもを百ペーセント自分の手で育てたいと奮闘することになってしまったのです。出産するまでは、姑や母に子どもを預けてそれまでと同じペースで仕事や研究を続けないと安易に考えていましたが、この変化には自分でも驚き、信じ難い思いでした。仕事や研究を捨てる気はないのに、一時でも子ども

を預けていられない自分の気持ちを素直に全面的に肯定するというのは、たやすいことではありませんでした。

今になってみると、自分が、全力投入して子どもを育てたいと思う気持ちを素直に肯定することができますし、それを押し殺してこなければならなかつた女性の苦しさがわかります。それには、自分が年齢をとったことや時代が変わつたこともあります。初めて子どもを産んだのは二十四歳でしたし、自分自身で遊びたい心や社会人としての仕事に挑戦したい意欲は大変強く、妊娠して身体的にも精神的にも多くは制限が加わることには大きな抵抗を感じたものでした。時代的には、今よりは結婚した女性に、あるいは妊婦、母親に対して古い価値観が周囲から抑圧的に働いて、その分、余計に束縛されていましたと思います。そんな世代の母親たちは、私も含めて、少しずつ新しい動きを作つてきましたと思います。様々な道があつたことでしょう。

その中で、私自身は大学での専門が子どもの発達や保育であったこともあり、たとえ家庭に専念しても、自分

の子どもや身のまわりで研究を続けていくというものでした。子どもが二人になり、ますます身動きがとれなくなると、それでもしなければ世の中から取り残されてしまいそうな気がしたのです。私の場合、専門分野であつたからなおさら、子育てを他人任せにできなかつたといふことも言えますが、今のように男女共学で、女性も高等教育を受ける割合が飛躍的に増している時代にあっては、家事、育児に専念する生活に疑問や不満、不安がない女性というのもまた極端に少なくなつてゐるはずです。私たちのグループでもそう感じてゐる人は多く、子どもを保育所に預けて働き続けている人も少なくあります。

私たちのグループでもそう感じてゐる人は多く、子どもを保育所に預けて働き続けている人も少なくあります。私たちのグループでもそう感じてゐる人は多く、子どもを保育所に預けて働き続けている人も少なくあります。私は何の肩書きもない主婦で、母親としてのキャリアはたかだか十二年ですが、それでも、初めて子どもを持つお母さんや、初めて幼稚園、小学校に子どもを入れるお母さんたちは、何らかの助言や励ましを与えることのできる立場にあると感じ、行動を開始したところです。

現代は女性の時代と言われ、翔んでる女性からキャリアウーマンへと言葉を変えて、仕事の上でも女性が男性と対等に能力を発揮することが善しとされるようになってきています。掛け声や揶揄が飛びるのは、まだ本格的にそういう事態になつていないことのあらわれでもあるのですが、少なくとも方向は示され、その幕あけの時ではあるわけで、そこには新たな問題の展開も起こつてきます。それは、出産、育児にまつわる問題で、言葉を変え

少しでも支援できたらと考えてゐるのです。それが「はるにれの会」発足の動機のひとつです。

幸いにも、「遊びをみつめる会」がそういう孤立感から私を救つてくれましたが、救いの場を見出せずにいる人も多いのではないか。私たちはそう思つて、今度は、今まさにそんな閉塞的な状況に置かれた母親を

て言えば、母性の危機ということになるでしょう。

母性そのものは、母観である（になる）女性にだけあるのではなく、子どもを慈しみ育てる心として、男性の中にも見出すことができますし、子どもの中にも見つけることが可能である。広く人間にとつて普遍的なものだと解釈することができます。

再び体験的な話になりますが、私が最初の子どもを産んだ頃は、世の中が将来に対し悲観的で暗い時代で公害問題などを考えると、果たして、この子どもの未来はあるのだろうか、そのまた子どもは……と、産んでしまっても健康でしあわせな未来を親である自分たちが作り出してやれるのだろうか、と不安にならざるを得ませんでした。子どもが生まれてはじめて、私はそのような遠い未来を自分に想わるものとして強く意識させられ、そのための未来を自分も人類の一員として良い方向に持っていくなければならぬ重大な責任があるのだと自覚させられたのでした。そして、そう気づかてくれた子どもとう存在の意義をはつきりととらえることができた気がしました。

ました。

その後、公害問題は、あるものは多大な犠牲を払った後改善されましたが、完全に消失したわけではなく、常に新しい問題が起きてきて、人類の未来はバラ色一色というわけではありません。かと言って、全くお先真暗というわけでもなく、進歩もあれば、不断の努力によって解決の道があるということもわかつてきました。こうしてあらゆる問題が他人事でなく、大人にはすべて自身の、ひとりひとりの関心や努力の対象になるものだということが私にはわかつてきました。こういうことを理解することが親になることであり、人間として成熟していくことなのだと思っています。人間の一生としては、この段階でも真に成熟、完成ということにはならず、まだ先に老年期があり、最終的にはいかにして死を迎えるかという大きな問題が残されています。

もうひとつ体験的に得たことですが、老人と子どもの関わりということも、小説等では昔からひとつのテーマになっているように、人間にとつて大切なもののよう

す。子どもを持つと、子どもに本を読んでやつたり、お話を聞かせたりするようになりますが、私はもともと子ども向けのと言われるお話が大好きで、よく、自分の方が夢中になってしまつたりします。その中でも忘れられない思いが幾つかあります。それは、ダイシエスト版や子ども向けに改められたものでなく、オリジナルな形で書かれたものが多く、そのひとつに『アルプスの少女ハイジ』があります。確かに少女時代にも何度か読んだことがあつたのですが、大人になって読んだ時に、全く新しい面白さが発見されたのです。それは、ハイジのお

じいさんやクララのお医者様の心でした。彼らにとってハイジは、自然や神とのかけ橋のように存在していたのです。そのことを私は、子どもの頃には全く理解しなかつたが、あるいは、子ども向けに改められ省略された内容の本を読んだのか、今もつて知る術もありませんが、子どもに本を読み聞かせることには、こんな意味があつたのかと、しみじみうれしく思つたものです。そしてこの本の作者が意図していた深い意味を知ることができ

本当に良かつたと思いました。こうして私は、何年も何十年も経て、再び同じ本を読むことの価値をも教えられ、幾重にも感激してしまつたのです。

ハイジを育てるこことよつて信仰を取りもどすことのできたおじいさんの例に見るよう、人間にとつて母性というものは全くことのできない極めて大切なもののなります。その大切な母性を育てる努力を私たちは決して怠つてはなりません。はるにれの会は、言いかえれば、母性を育てる会ということになるでしょうか、少なくとも出発した意図はそこにあるのです。

こう書いてきたからと云つて、子どもを育てることは苦手だわというお母さんに、無理矢理、良い母親になるようになどとお説教がましいことを言うつもりは、私は全くありません。共働きの家庭の子どもが非行に走る確率が高いなどといふことしやかな神話も樋口恵子さんがその著書で論破していますし、母原病などという言葉を流行させて、やたら母親に不安や自責の念を起こさせた現象も今は静まつてゐるよう見えます。（母原病

という言葉のイメージと本の著者の意図する内容とは別であることをお断わりしておきます)

むしろ、私は、これからも、右のようないたずらに母親の不安をかきたてる情報がはんらんしないようにと、願わざにいられないのです。こんな危険な情報の洪水の中で、子どもを育てていくのは、決してたやすいことはありません。昔に比べると多くの女性が、長期間学校教育を受け、先生という存在からは情報を安易に肯定的に取り入れてしまう傾向を持つようになつていて、活字を信仰する人もはるかに多くなつていています。そしてまたテレビなどの映像による強烈な印象も母親に搖さぶりをかけてきます。ゆっくりと考えてみると時間がなくなって、自分の感性を眠らせたまま、外からの動きに押しづされてしまう人がふえています。子どもを育てることは、今の世の中のスピーディな動きとは対照的にまるでスローモーションのようなゆったりとした流れの中にあるのですが、その流れは、静止しているかのように見えてします。そこに焦りやいら立ちが生じる原因

があるのでしょう。思えば子どもを育てる人々には、困難な時代です。その人々をさらにせき立て突っ走らせようとする動きの何と多いことか。何か、どこかが、おかしいと心の片隅で思いながらも流されていくことが多いのです。私たちはその何かがおかしいという感じ方を大切に、そこを支点にして、大きな流れを正しい方向に持つていかなければと思います。

母性は大切なものでそれを守り育てていかなければならないという一般論はよくわかるけれど、具体的に個別の悩みをどう解決していくべきなのかということになると、手だてがわからないということは多いでしょう。そういう方たちもどうぞ会に加わって下さい。あるいは、手紙や電話で相談をお寄せ下さい。

二二六 東京都荒川区南千住七一二四一四一三〇

電話 (〇三) 八〇六一七三二六